

開ける綴じるなどの事務用文具機器で 故あつて百年の長寿企業に

創業・大正8年(1919年)。

令和元年にニューコン工業は、100周年を迎えた。日本で唯一、パーフォレーター(穴あけ機)などの事務用文具機器のフルラインナップで製造・販売を行ってきた。世界を見回して見ても、同業はドイツ、イタリア、アメリカのみである。客先は、中央省庁、自治体、裁判所、警察などのほか様々な企業……。多岐にわたるニーズに応じ、トツプランナーであり続け、長寿企業を作り上げてきた。「そこにあるものは何か!」、フォーカスしてみた。



代表取締役社長 近藤 英一郎 氏

穴文字と穴あけ機

創業当時は、2穴・4穴パンチなどの製造・販売を行っていたが、2穴パンチの形状を、4角形から3角形に変更し、大ヒットに。発想力はスタート時からあった。
金属や紙に穴をあけて文字をつくる

穴文字というのがある。

中央競馬会との取引で、馬券(勝馬投票券)に数字の「穴文字」を使うことになったが、日本にはなく、アメリカの輸入品を使うことになった。当時は、海外からの輸入品がいざ故障をした時の対応に大変な時間と労力がかかっていた。国産化されれば、修理対応もよくなるという思いがあったのだろう。

その後、初代社長の近藤徹氏によって国産化された穴あけ機による穴文字が馬券に使われる。

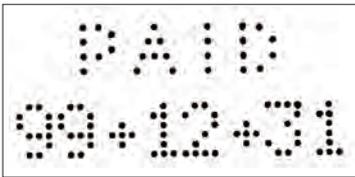
競馬、競輪、競艇、オートレースは、日本中にあつたので、独占状態で利益をあげていった。

オッズを電算化して電光掲示板に表示するようになり、馬券も印字方式に切り替わって、穴あけ機は使われなくなっていた。

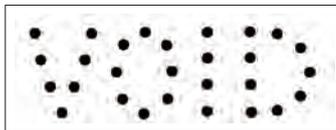
捨てる神あれば、拾う神ありや

耐えていれば良いこともある。穴文字は偽造改ざん防止に加えて、印鑑やスタンプと比べて数十枚の文書を一度に処理できる効率性が認められ、「契印機」といって、印鑑による割印の役目を果たしながら、同時に、文書を綴じ込むこともできる機械が脚光を浴びることに……。

契印機の穴文字を使えば、業務の効率化が図れると中央省庁から各自治体に広がっていった。さらに裁判所



PAID
99+12+31



VOID

の判決文の割印などに使われた。

変わったところでは、安全靴中敷のロットナンバーに使われたりして思いもかけない方向にも広がっていった。抹消機という機械は、払い出した銀行の通帳や有効期限の過ぎたパスポートに穴文字をあけてひと目で無効とわかるようにするものだ。

現社長の近藤英一郎氏は、2008年3月に37歳で5代目社長に就任した。ところが、その年の9月にリーマンショック。若い社長にいきなり襲った洗礼である。平時に戻るのに1年半かかり、その間、給料の減額を行ったが、人員整理はやらなくて済んだ。悪いことばかりではない。リーマンショックのその年に、代理店を通して、警視庁に契印機導入を進めていたのが実り、全警察署への配備が



打抜機の組立作業

決まった。まさに「禍福はあざなえる縄の如し」だ。

芸（伝統の技術）は身を助く

副社長の近藤政二氏（75歳）は、先頭に立って技術の伝承役を務め、伝統の技術の大切さを、3人いる開発部に、折に触れ説いている。あるとき近藤副社長は、有用と思われる本を書店で見つけ、「読んでおきなさい」とスタッフ分買ってきて渡した、そうだ。

シールプレスという機械がある。紙にエンボス（凸凹）を作って学生証や身分証明証としてロゴなどを刻印するときに使う。手動のものはあったが、技術力がある同社は、電動のものをつくってしまふ。それが差別化につながっている。

肝は譲らず、ニーズに応える

穴あけ機、綴じ込み機等は、頑丈さを維持するために铸件で作られ、重量は30キロ、40キロにもなる。運送費も顧客にとつてばかにならない。伝統のものではあるが、軽量化して提供することはニーズに応えることになる。

老舗と名が付けば肝のところは譲らないものだ。ニューコン工業にとつて、その肝は機械本体の剛性で、紙に小さな穴を開けるためにも機械本体に剛性が必要で、それが十分でない針はすぐに折れたり、曲がったりしてしまうのだ。同社が闇雲に伝統に拘泥しないのは、要所となるところが、「頑丈であれば、他はそれほどでなくてもいい」という柔軟な姿勢と緻密に部品を作り分ける技術力が、製品のリニューアルとなり、小型化、音の軽減などバリエーションを増やしていく原動力となっている。

周りが応援してくれる会社

今、ニューコン工業には製薬会社や不動産会社



電動契印機 PEF-18

電動2穴パンチ PN-50E

などから新しい需要が出ています。製薬会社は、データインテグリティ対策として、同社に依頼がくるようになった。また製

薬会社がよく使うサイトを中心にインターネットを介しての質問、引き合いが増え、穴文字に関して「こんな使い方をすれば面白い」という声が出てきたり、新しいチャネルが開けている。

ニューコン工業は、会社あるいは製品、それとも両方、好かれているのは確かだ。

「業務が楽になった」と口コミで広がっていった業界もある。「転勤した先には機械がなかったのので、上申書を書いて導入してもらった」「同じ会社の別事業所にはないので紹介してもらった」等々。また部品・原材料などのサプライヤーからは、長い歴史を通して好意をもつての引き立てがある。

しかし、国内に競争がないからといって、悠々としているわけではない。

海外メーカーから廉価な商品が入ってくれば対処を考える。逆に某国は、新製品が出てこないのので、小型・軽量化した使いやすい製品を出していく等、多方面にわたって動いていることは付け加えておきたい。

株式会社ニューコン工業

- 代表取締役 近藤 英一郎
- 本社 東京都江戸川区中央 1-8-15
電話 03-3655-6151(代)
きらぼし銀行 小岩支店会員

取材・構成 ● 永瀬 満



本社・工場